

令和7年度学校評価自己評価報告書および学校関係者評価報告書

高島市立青柳小学校

| | | | | | |
|--------------------|---------------------------------|------------------------------|--|-----------------------|--|
| 学校 教育 目 標 | 校訓 「良知に生きる」 | 昨年度 の 評 価 概 要 | ○中江藤樹先生の地元であるので、校訓「良知に生きる」を大切にして、藤樹先生の教えを学校教育の中核に据え、これまでの『青柳小学校ならではの行事』のみならず、日常の学校生活の中でも藤樹先生の教えを意識させ、実践につなげられるような取組をしていく。学校行事「藤樹デー」では、児童が主体的に学習に臨めるように、児童の意見を尊重しながら行う。 | 中 期 的 目 標 | めざす子ども像 徳：たがいに思いやる子 知：よく考え実行する子 体：明るく元気な子 めざす学校像 地域とともにある学校 |
| | 学校教育目標 自ら学び 心豊かでたくましい 子どもの育成 | | ○読書活動では、朝読書の定着が進んでいるが、さらに、地元の図書館との連携を図り、ブックトークの継続や図書館訪問を増やしていく。また、家庭での読書習慣の定着を図るために、PTAとも連携していきたい。 | | |

| 評価項目（指導力点） | 指標：到達目標（成果指標・取組指標） | 達成状況 | 評定 | 改善方策 | 学校関係者評価 |
|--|--|--|----|--|---|
| ○学力の向上 ・「我が校の学ぶ力向上策」の改善により学力向上を図る。 ・保護者と学校が連携し、家庭学習や読書の習慣化に取り組む。 ・基礎基本の定着と活力の向上を図るため、算数科・理科・社会科等の専科指導を充実させる。 ・ICT機器の有効活用を図る。 | ・学ぶ力向上策の推進において、学期ごとのPDCAサイクルで評価、改善を加え実効性のあるものにする。 | 全国学力・学習状況調査の分析を踏まえた学力向上策を推進している。OJT等で各学年の取組を交流し授業改善に取り組んでいる。教職員評価では、85%がPDCAサイクルにより学力向上に取り組んでいると回答している。 | B | 学力向上推進委員会を中心に、進捗状況の確認と改善方策をさらに検討する。家庭学習の課題の与え方を工夫し、意欲的に家庭学習に取り組めるようにする。 今後もPTA研修部からの呼びかけで継続して取組んでいく。自己肯定感が高まる声掛けなどの関わりを意識する 学習のつまずきや疑問については、丁寧に個別対応していく。 研修等で学んだICT活用法を職員間で交流し、実践に生かす。 | ・学習規律を守り、しっかり学習に取り組んでいる様子が窺える。教員が児童に丁寧に対応しているからだと思う。 ・自己肯定感が高いのは、PTA活動「長所の花を咲かせよう」など、自己肯定感が高まることを意識した取組の成果であろう。 ・専科教員による授業が始まり数年が経つ。児童は専門的な授業を学べ、教員も教材研究の負担が減っている。 ・ICT活用学習は、視覚的にわかりやすく、教職員の負担削減になっているが、文字を書いて自分の考えを表現することにも取り組む必要がある。効果的なICT活用について留意する必要がある。 |
| | ・自己肯定感を育む活動(PTA「長所の花を咲かせよう」運動)の継続実践と振り返りを行い、自己肯定感を高めることにより、目標を持って、学びに向かう姿勢を養う。 | 児童評価では、「自分には良いところがある」と回答している児童は90%である。この活動だけでなく、日頃から自己肯定感が高まる声掛けを心がけていくようにしたい。 | A | | |
| | ・「先生はわからないときに丁寧に教えてくれる」（児童評価90%以上) | 児童の疑問等には個別指導を中心に丁寧に対応することを心掛けた。児童評価結果は96%である。 | A | | |
| | ・ICT機器の効果的な活用により「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図る。 | 授業における学習ツールとして意見交流や学習のまとめ効果的に活用できているが、工夫の余地があると思われる。 | B | | |
| ○言語活動の充実を図る。 ・国語科における「書く活動」を中心として、各教科での言語活動の充実を図り、思考力、判断力、表現力を育む。 ○小中一貫教育を推進する。 ・小中学校の教職員が共に、授業づくりや集団づくり、地域連携などの共同研究を行い、「目指す15歳像」を共有して教育活動に取り組む。 ○読書活動の充実を図る。 | 校内研究のテーマ「筋道を立てて考え、自分の思いや考えを人と伝え合うことができる子ども ～書く活動を通した表現する力の育成～」の研究実践を積み重ねる。 | 各学年、学期に1回、国語科で題材について自分の考えをまとめて表現する活動を行い、児童の「書く力」の伸長に努めた。また、校内研究会では、講師を招聘し、授業力の向上を図った。 | A | 自分の考えを書く活動を行い、添削して書き直し、発表などで他者に伝えることを継続的に行う。 研究したことを共通理解し、次年度以降の道徳教育に活かす。 読み聞かせやブックトークの実施や図書館の利用を増やすことで、児童個々に合った本の選定ができるようにする。 「家庭学習・ふれあい週間」を継続的にを行い、親子活動の推進を図っていく。 | ・校内研究で、書く活動について研究を深め、徐々に児童の書く力が伸びてきている。 ・想像力を豊かにする読書は、大切である。朝読書だけでなく、読んだ本の感想などを貼り出すなどして、読書の雰囲気を高めてもらえる良い。 ・図書館に出かけたりブックトークを取り入れたり、いろんな分野の本と出合い「読むこと」が楽しくなる工夫がされている。 ・読書習慣がない家庭が多い。保護者も意識して読書をする習慣ができること良い。 ・「家庭学習・ふれあい週間」を設けることで、親子のふれあい時間が増えて、とても良かった。 |
| | ・小中学校の教員が部会に分かれ、「目指す15歳像」を共有して、研究に臨み、互いの児童生徒を見合い、児童生徒のより良い成長を目指す。 | 小中学校の教員が共に、授業作りや集団作りについて研修を深めた。小中一貫教育Weekでは、小中学校の児童生徒の様子を参観し合うことができた。 | B | | |
| | ・学校や家庭における読書活動の充実により、読書の楽しさを実感させ、読書習慣の定着を図る。 | 朝読書の定着はできているが、家庭で読書をする習慣が身に付いていない児童が多い。 「家や学校でいろいろな本を読んでいる」児童は92%である。 「子どもに読書の習慣が身に付くように努めている」保護者は38%であった。 | B | | |
| | ・中学校の定期テストの時期に、「家庭学習・ふれあい週間」を設け、低学年は親子のふれあい、高学年は自主学習に取り組む。 | 低学年での親子ふれあい活動に、積極的に取り組む家族が多く見られた。高学年の自主学習においても、強化週間を設けたことで意識して取り組む児童が増えた。 | A | | |
| ○集団づくり ・学級活動における話し合い活動で、意見を述べ合い、自他共に大切にすることを養い、よりよい集団形成に努める。 ・けじめのある生活を送ることができる集団を育成する。 ・周りの子どもたちや大人に対して思いやりの気持ちをもって接することができる集団を育成する。 ・異学年交流を通して、望ましい人間関係の育成とリーダーを育てる。 | ・学級活動における話し合い活動を充実させる。(児童評価「友だちと話し合う時、自分と違う意見について考えるのは楽しい。」90%以上) | 各学級で話し合い活動を積極的に行い、互いに意見を交わし、自他共に認める雰囲気が出てきた。児童評価結果は94%であった。 | A | 話し合い活動の持ち方について、教員の研修を重ね、児童がさらに意欲的に話し合い活動に望めるようにしていく。 いじめ未然防止のため、職員の意識を高め些細な出来事も見逃さず、職員間の報告、連絡、相談、記録を徹底する。 道徳教育、人権教育を柱とした心の教育を大切にしていく。今後も1年生と6年生が一緒に清掃を行う。 藤樹デーや運動会以外にも、たてわり班で活動できる場を工夫する。 | ・学級会での話し合い活動を継続的にを行い、自他の意見を聴き合い、受容し、よりよい集団作りができるように努めた。今後も継続したい。 ・小規模校であり、児童全員に目配りをして、いじめの未然防止対策を熱心に行っておられるので、今後も引き続き行っていただきたい。 ・たてわり活動、1、6年ペアの掃除、運動会等を通して、上学年と下学年が良い関係で学校生活を送れている。 ・登校では、上級生が先頭に立ち、下級生に気を配りながら登校していた。 ・児童はACなどの地域行事をとても楽しみにしているため、引き続き地域と連携した行事に取り組んでいただきたい。 |
| | ・いじめ未然防止を日常的に取り組む。生徒指導の情報交換やケース会議等による事案への早期かつ適切な対応を行う。 | いじめ未然防止の取組、生徒指導に係る定期的な報告と情報共有、事案発生時の早期かつ組織対応を引き続き行う。 | A | | |
| | ・あらゆる教育活動を通して、周囲の友達や他学年の友達のことを考え、思いやりの気持ちを育てる。上級生は下級生をいたわり、下級生は上級生に感謝の気持ちを持ってよう指導する。 | 学級活動や道徳科の授業を中心に他者を思いやる気持ちや行動について考える機会を多く設定した。1年生と6年生と一緒に清掃を行い、6年生は1年生をいたわり、1年生は6年生に感謝の気持ちを持ってようとしている。 | A | | |
| | ・異学年交流や児童会活動の活性化を図る。(たてわり活動、集団登下校、運動会等) | 「たてわり活動や全校的な行事では協力して活動している」と回答した児童は、94%である。 各学年単級であることから、さらに異年齢交流を増やすことを検討する余地がある。 | A | | |
| ○藤樹学習を中心とした地域連携 ・中江藤樹の教えを学ぶ機会や地域の文化や伝統を取り入れた学習を取り入れる。 ・PTAやAC(青柳コミュニティ)、地域学校協働本部との連携を深める。 | ・「藤樹デー」や「大洲小学校との交歓会」、「立志祭」等、青柳小ならではの取組の充実を図る。 「学校では藤樹先生に関する勉強を行っている」(児童評価90%以上) | 「藤樹デー」や「大洲小との交歓会」「立志祭」は藤樹先生の教えを学ぶ伝統行事として実施し、児童も達成感を感じている。 「学校では藤樹先生に関する勉強を行っている」と回答した児童は、91%であった。 | A | 藤樹先生の教えを学ぶ伝統行事として継続・発展させていく。 藤樹先生の教えを、道徳科や総合的な学習の時間に地域教材として、継続的に取り入れる。 学校運営協議会で熟議を行い、地域連携の取組充実を図る。 学校地域連携カリキュラムの更新と保護者ボランティアの発掘を行う。 | ・中江藤樹生誕の地にある小学校として、様々な取組がされており、心強い思いである。学んだことを一生懸命に生かしてほしい。 ・藤樹デーや大洲小との交流会など、青柳小ならではの学習はとても良いので継続していただきたい。 ・歌「貌、言、視、聴、思」を全校生で歌い、その意味について考え、行動に移そうとする意識づけができた。児童は、生き生きと歌うことができた。 ・わくわくタイムでは、地域の方の長けた技術を披露していただき、いろんな活動に取り組むことができた。 |
| | ・道徳科や総合的な学習において、地域教材を取り入れ、中江藤樹の生き方を学ぶ。 | 各学年、道徳科の授業において、取り込む地域教材が決められており、児童は、毎年中江藤樹の生き方を道徳の授業で学んでいる。また、総合的な学の時間に「藤樹かるた」を読み解き、内容を吟味している。 | A | | |
| | ・学校運営協議会での熟議を通して、目指す子ども像の実現に向け、地域学校協働活動の充実を図る。 | 学校運営協議会での熟議を重ねるごとに、地域学校協働活動が充実してきた。学校の現状を知っていただく機会にもなっている。 | A | | |
| | ・学校運営協議会、PTA、AC(青柳コミュニティ)、地域学校協働本部等と連携した取組を行う。 | 保護者や地域ボランティアによるきめ細かな支援により、充実した教育活動が行えた。学校地域連携カリキュラムを更に更新していきたい。 | A | | |

| | | | |
|-------------------------|---|----|---|
| 学校 関係 者 評 価 | 総 評 | 評定 | 学校関係者評価を踏まえての改善点 |
| | ・校内の先生や6年生と意見を交わしながら学校地域連携カリキュラムの見直しができ、より良いものへと改訂していただくことが良かった。保護者にも呼びかけていただくことで、教育活動に関わっていただく方が増えたので良かった。 ・中江藤樹生誕の地にある小学校として様々な取組がされており、藤樹先生の教えを学んでいる。オンラインでの大洲小学校との交歓会など『青柳小学校ならではの行事』に引き続き取り組んでいただきたい。 ・学校教育目標の具現化に向けて、「良知に生きる」を大切にしながら教育活動が行われている。読書の継続、書くことの充実を全校的に進めつつ、リーダーの育成を踏まえた集団づくりを行っていただきたい。 ・地域に帰ってからの子どもたちの様子で、気になることがあれば遠慮なく学校へ伝えることができるような、学校と地域の良い関係性ができるように努めたい。 | B | ・藤樹先生の教えを学校教育の中核に据え、これまでの『青柳小学校ならではの行事』のみならず、日常の学校生活の中でも藤樹先生の教えを意識させ、実践につなげられるような取組をしていく。また、道徳科や総合的な学習の授業でも中江藤樹の教材活用について研究していく。 ・読書活動については、朝読書を継続したり、地元の図書館との連携を図ったりして、ブックトークの継続や図書館訪問を増やしていく。また、家庭での読書習慣の定着を図るために、ふれあい習慣に「親子読書タイム」のような取組を設定するなど、家庭と連携した取組も検討していきたい。 ・次年度以降も「学校地域連携カリキュラム」に基づく地域学校協働活動の更なる見直しを図り、カリキュラムを「地域とともにある学校づくり」の重要なツールとして保護者や地域に広報し、協働活動の充実を図っていく。今後は、現在支援してくださっている地域ボランティアだけでなく、保護者に教育活動への参加を呼び掛け、ボランティアを増やしていく。協働活動がボランティアや学校職員にも過度な負担にならないよう、持続可能な活動として定着できるように留意したい。 ・職員同士の同僚性を高め、児童や保護者、地域から信頼を得られる学校づくりに努めてきた。いじめ未然防止のための取組など、今後も引き続き丁寧に行っていただきたい。 |

4段階評定 (A 目標を十分に達成 B ほぼ目標を達成 C やや不十分 D 改善を要する)